2020年9月26日付け茨城新聞

いばらきの〝次の一歩〟
筑波総研リポート

次の一歩「生き方」改革

筑波総研主任研究員
冨山　かなえ

実は9月26日は私の結婚記念日である。このような日に、茨城新聞へ寄稿できる機会をいただき、大変うれしく思う。夫とは約100キロの遠距離恋愛の末に結婚。結婚後もそれぞれの場所で仕事を続けることを選び、「別居婚夫婦」となった。その話をすると、茨城に住む友人や知人、親戚から「別居婚?!大丈夫なの?」「なんとか一緒に住めるようにできないの?」とけげんな顔をされたりする。しかし、埼玉県内から都内へ通勤するいとこからは「今の時代、そういうのもアリだよね」とサラッと言われた。これまでとは違う返答に驚き、同時にとてもホッとした。

頭では理解できても、実際、目の前に現れた現実や課題、新たな提案などをなかなか受け入れられない、という人は多いと思う。私自身も約30年間茨城で暮らしてきたため、行動・思考・感情の一定部分は既に凝り固まり、無意識のうちに大切なものを見落としている可能性は十分にある。

そこで国籍も年齢も仕事も価値観も違う人の意見を聞いてみようと思い、動画投稿サイト「YouTube」再生回数9・2億回をたたき出した、当時16歳の海外女性アーティストのインタビュー動画を見てみた。「SNS（会員制交流サイト）が当たり前にある時代で育ったから、SNSが当たり前ではなかった世代の感覚は分からない」。そう、これだ。生まれ育った時代や地域、仕事や周りの環境、家族や友人、自身が抱える課題などが違えば養われる感覚や解決方法も違って当然。ところが人は未知なる事象に対して違和感を抱き、戸惑い、拒絶してしまう場合がある。

しかし、世界中を恐怖に陥れた新型コロナウイルス感染症、毎年「数十年に一度」と枕詞（まくらことば）が付く自然災害など、これまでの常識をはるかに越えた事柄が日々どこかで起こり続けている。私の別居婚の話も規模は違えど、それに該当するだろう。

「ウィズコロナ」をきっかけに、テレワークをはじめとする「働き方」の改革がようやく市民権を得始め、「新しい生活様式」なる考え方も登場した。次に私たちが行うべきは、「生き方」の改革だろう。何が起こるか分からない時代。だからこそ、「Try anything」の心を持って、次の一歩を踏み出したい。そしてお互いに「それもアリだね！」と許容し合うことで、私たちは〝新しい景色〟にたどり着けるだろう。

今夜は、数週間ぶりに会う夫と、テークアウトしたレストランのご馳走（ちそう）を囲み、私たちなりの〝次の一歩〟を考えたいと思う。

（次回は11月28日掲載）